

令和4年1月1日発行 春燈/第77巻第1号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2022 January

1 月号



成瀬櫻桃子の句

妻の名の梅咲き妻と経し月日

『風色』昭和四十八年

平成元年、櫻桃子主宰のご自宅での句会に出席の私達は緊張がみなぎっていた。古今東西、幅広い知識と見識をお持ちの先生の「硯」謡「美菜子さん」のお話を伺い、句会後のお話「マホメットは妻を九人もついていた、さぞかし大変だっただろう」に一同緊張がとけて笑顔がひろがった。ほっとした。奥様はにこやかに私達をもてなしてくださった。

三代川玲子

成瀬櫻桃子の句

子のらくがきのこる襖は貼りかへず

『風色』昭和四十八年

「子を施設に送る」と前書がある。
長女美菜子さんがダウン症で「素心学院」に入院。十歳であった。幼くして親元を離れる事が出来たのは両親の献身的な養育があったからこそと。このとき先生は天高し仰ぎて泪こらへけりと詠まれている。切なく伝わる。その襖は終生貼りかえられなかったと推測される。

山浦紀子

安立公彦



灯台の白堊凜々しや十一月

江戸川の流れ豊かに冬に入る

神の留守鳥居の鴉誰を呼ぶ

綿虫に夕影早き寺院かな

黄は夢を語るや石路揃ひ咲く

燈下集

○ 本田 保

今日の月さへぎる雲のなかりけり
秋の日の何をするにも良かりけり
玉堂の水車きつてもきれぬ秋
菊の酒止めてゐるのにすすめられ
推敲のいいと限らずやや寒し

○ 瀬戸 峰子

恙なく過ごし野菊を愛で居る日
母偲ぶむらさき淡く紫苑咲く
魯_ニHP_ニ田を鳥の歩く真つ昼間
檀の実夕日に紅く花と裂け
秋思ふと些事に拘はる事なくて

○ 清水 美子

色深き残花の矜持百日紅
新涼や声聞きたたくて長電話
月清し東の空をひとりじめ
パラリンピック励まされをり星月夜
真夜中の地震のあとの稲びかり

○ 吉川 隆



一機二機三機と続く天高し
風立つや波立つ稲穂ほしいまま
人声に集まる鯉や秋深し
鳥渡る天橋立添うてかな
百年余の木造教会鬼胡桃 (舟後宮津)

○ 片山博介

秋寂ぶや安土に古りし耶蘇の墓 (金鷹院)

童謡を歌ふ船頭白秋忌

みそかごと交はし外山の月夜昔

『猿蓑』に落つる自髪や冬隣

兄の忌はふるさとに雁渡るころ

○ 府川昭子

夜の風の重くなりたる金木犀

新涼や貫入ほどよき秋茶碗

桐一葉朱き夕日に耐へきれず

豆菓子に口いきりなき夜長かな

名月を見てゐる心空白に

○ 永島雅子

テーブルに香り添へたる庭の菊

夫と唄ふ小学唱歌秋の昼

小鳥来る葉陰の枝に声こぼし

庭に差す秋の日差しの煌めけり

银杏散る雀の集ふロータリー

○ 矢口笑子

小鳥来るさして用事の無けれども

衣被つるりと話逸らしけり

百舌鳥鳴くや深川めしを食べ損ね

冷まじや床に落せる鍵の音

本棚の本片寄する暮の秋

○ 松山三千江

句碑の字に師の面影や新松子

さりげなく始まる嘶秋羽織

歩むほかなきライオンの秋思かな (野毛山動物園三句)

行く秋やひとりで燥ぐチンパンジー

たま吉てふ狸見られぬ檻の黙

○ 藤原若菜

今生の虫の音今宵はじまりぬ

オパールの秋の光彩母のこゑ

身に入むや講座を了ふる師の板書

白帝のふところふかきひかりかな

「ローマの休日」の王女の矜持神の留守

○ 大文字孝一

「じぢでうさま」の声の重なる豊の秋

秋深し焼おにぎりの焦げ具合

転がりて居場所に惑ふ榎植の実

明かされぬ古墳の主や蚯蚓鳴く

残菊や文字読み難き無縁塚

○ 和田絢子

秋夕焼西方浄土は夫の国

鉛筆の芯尖らせて秋深し

手の届かぬあたりにあまた柚子熟るる

冬立つや駅前町名の天王山

柿熟るる獣も鳥も人も来ず

○ 神田恵琳

鑿にぎる仏師無言や炭に寄る

月しぐれ昭和平成令和住む

障子貼るわが不器用をさらけ出し

鷹匠の腕より離れ天翔る

竹垣の棕櫚縄ゆるび冬隣

○ 小山繁子

木の実落つ池の辺ひとを佇たしむる

草の絮旅立ちの日の空の青

武蔵野の木の香水の春秋惜しむ

小春日の木道ゆつくり渡りけり

水際の鴨減りもせず増えもせず

○ 小島昭夫

爽やかや和光の時計正午打つ

稔り田を眼下一望瑞穂かな

初さんまおろし金をも新調す

うはの空で句評を聴くや桐一葉

泣きべそをかく胃袋へ根深汁

○ 渡辺若菜

石山寺に残る絵巻や実紫

落城の石垣高し草紅葉

北海の浜に柳葉魚のすだれ干し

秋高し出産ラッシュの動物園

愛媛蜜柑花びら切りに育つ愛

○ 西岡啓子

山羊の乳飲みたる記憶草の花
魯田に農機具店のテントかな
白じろと大河の流れ秋深し
隣り合ふ家それぞれの松手入
筆を持つことの久しや十三夜

○ 中村紀美子

ひとり訪ふ荷風旧居やみみづ鳴く
青年の漕ぐ渡し舟柳散る(矢切の渡し三句)
ここよりは下総の国野菊咲く
晩秋や紫煙ながるる舟着場
秋麗や老いには少しまぶしすぎ

○ 浅木ノエ

新松子大きく開く朝の門(祝・九九〇号)
石叩き試歩の一步をもう一步
聞いてすぐ忘るる花や秋うらら
流木をあをき膚や十三夜
読みふける『まくら』に釣瓶落しかな(尊小三選)

○ 懸林喜代次

座頭市口ケの昔や芒原
一賜高音句友の病死嘆くがに(尊・敏ぎん)
特選のA I俳句文化の日
大賞はこの宮司ぞ菊花展
リサイクル店に螺鈿の櫛や近松忌

○ 豊谷ゆき江

人情の通ふ酒場や衣被
栗飯や老人会のバスツアー
小回りの利く子に育ち蜜柑むく
行き違ふ思ひは遠し秋暮るる
熱々のアップルパイや冬隣

○ 後藤眞由美

イソップ絵本読むや窓辺のきりぎりす
月見の茶会並ぶ撫で肩怒り肩
松が枝にしばしとどまる月の舟
好物の林檎煮る夜や魔女めきて
いななきていななきて肥ゆ岬馬

○ 川崎真樹子

秋風や赤ちやんポスト開く音
夜の底に散り敷く星や虫時雨
秋の灯や木村伊兵衛の「万太郎」
長き夜やメメント・モリのことさらに
子の恋に手を焼く父や石叩

○ 齋藤晴夫

芒原穂波の果ての山上湖
富士花野風姿花伝の場の如く
蓑虫の揺れて松籟吹き渡り
村度の風がしきりに木の実降る
返り花書架に遺れる『智恵子抄』

○ 木村梨花

いつまでも手を振る別れねこじやらし
秋深し黒猫の目のエメラルド
渡り鳥一声高く鳴きにけり
本堂に人の声する冬隣
暮れそめて雲なき富士や冬はじめ

○ 河崎國代

泣き笑ひのこらへきれずや石榴裂く
野の風を叩き興ずる吾亦紅
長き夜の老化防止のクイズかな
にはかなる同齡の訃や残る月
山霧晴れ実朝の海沖に拡ぐ(十國峠)

○ 溝越教子

とほき日の我が家の定番むかご飯
会ひたくも会へぬ日つづき秋を刈る
二歳児の転びつきつ草の絮
幼児の歩幅まちまち木の実降る
古株に日に日に堅く猿首

○ 上野進

一房の葡萄の眠り買ひにけり
色ごとに採種朝顔とも別れ
寝返りて夢の頁を繰る夜長
秋空へへりが連れ去る滑落者
立冬の嶺々飛び立つがに風車連

余言 安立公彦

記憶とは形なき財爽やかに

片桐てい女

燈下集一月号の投句用紙を順番通り並べ、改めててい女さんの句稿を手にする。「群馬片桐てい女100歳」とある、てい女さんの字をしばらく見ている。てい女さんも感慨深い思いでペンを走らせられたことと思う。本誌開闢以来初めての「百歳」である。今後とも健やかに過ごして下さい。この句、「形なき財」がみごとだ。考えてみると正にその通りだ。重ねて「爽やかに」が、清澄な思いを呼ぶ。この句は、春燈俳句史に長く残る句である。

木片と紛ふ仏や秋の声

西川 保子

この句を見ながら、嘗て訪れた奈良の地を思い出していた。歴史の古い奈良には、名のある仏像が取りどりに納められている。「木片と紛ふ仏」は、形としてより、信仰の対象である。「御仏」として、歴史とともにその信仰を、参詣の人に与えて来た。時代が変わっても思いは深い。

この句、「木片と紛ふ仏」に、視覚的にも賛同の思いを深くする。塗装の著けく残る仏像には現実性はあるが、それを越した信仰の思いが、私たちを捉える句だ。

十三夜ゆつくり封を切る手紙

三上 程子

「十三夜」は、旧暦九月十三日の夜。十五夜の月に対して「後の月」とも呼ぶ。樋口一葉の小説の題名にもある。「十三夜」は、言葉自体詩形を為している。その十三夜を上五に置き、「ゆつくり封を切る手紙」は、深い内容を持つ句と言えよう。新派の舞台に通じるものを持っている。

縁側の椅子に腰掛けながら、ゆつくりと手紙の封を切る作者。十三夜の月が、作者の座る椅子をつつみ、封を切る作者の姿を写し出す。十三夜の季語を、包みこむ句だ。

狸化けもせず月光を浴びぬたり

中村嵐楓子

山麓の古寺の廻廊。昼間は賑わっていた境内も、夕暮と共にひっそりとして物音一つしない。古寺をつつむ森の上に月が掛かっている。廻廊を曲がったところに、一頭の狸が蹲っているのが見える。全身に柔らかな月の光を浴びている。人の足音を気にする風もないその姿に、しばし立ち止まる。まさに狸寝入りだ。「狸化けもせず」に、その狸

の本態をまじまじと

見る思いだ。これは私感。句の道は長い。休み所も必要だ。

ひとりにはひとりの矜持秋気澄む

鷹崎由未子

「ひとりにはひとりの矜持」、如何にも作者らしい姿勢の句だ。誰しもそうありたいと思いつつ、いつしか加齢とともに、その矜持の薄れゆくのを振り返るのだ。これは独り善がりではない。この「ひとりの矜持」は、わが身を、客観的に振り返って、初めて至りつく思いである。それはまた、同時発表の「来世また手をつなぎたき花野かな」の句にも通じよう。前句の「秋気澄む」、後句の「花野かな」ともに作者の思いをみごとに具象化している。

青レモン汝はすつぱくも恋の味

平野加代子

レモン(檸檬)はミカン科の常緑低木の実。果実は初めは濃緑、熟すると黄色となる。香りと酸味が強く、ビタミンCが豊富とある。この句の上五中七は若いレモンを指し、下五に到り、感覚的に思春期のレモンを表わしている。

「汝はすつぱくも恋の味」は善い表現だ。この「味」は、舌で感じるものではなく、感覚を詠んだ「味」である。

「恋の味」が甘いか酸っぱいかは、それぞれだ。千篇一律でないところに、「恋の味」の妙味がある。

「思ひ出の」、「木の实かな」とあると、中七に例えば「青春の日の」のような回想の言葉が多く来る。しかしこの句は、「ずつしりつまる」だ。「青春の日の」の回想を満たし切れない思い出である。

思ひ出のずつしりつまる木の实かな

久米 憲子

ここまで来て、中七の解釈を考えた。作者は林道を歩いている。椎、橡の実ほか、実の熟れる木が茂っている。足許に転がる木の実は、ずつしりと嵩のある木の实だ。しかしそれはあくまでも第三者の思いである。俳句の世界は広い。それは、思い出のずつしりつまる木の实なのだ。

新米やはつかに甘き夕ごろ

近藤 真啓

先日、隣人から新米を戴いた。新米の夕餉は如何にもふくよかだった。この句を見て、その賑よかさが甦って来た。

この句、「はつかに甘き」が善い。甘きと言っても、それは甘味ではない。香気に近い「甘き」である。更に、新米という言葉に伴う、感覚の甘さである。新米の出回る頃は、季節も落ち着き、穠

田の風情も善い。それらの思いをこの句の「夕ごろ」が占めている。作者は、春燈十一月号記載の「人影を描く」の末尾で、春燈一〇〇〇号を「待望の」と書いている。正

当月集

安立公彦選



○ 農野憲一郎

○ 山本泰人
懸崖に精魂つくす菊花展
秋うらら孫のゼッケン捜しけり
柿赤し竹馬の友よ澄める空
亡き友は賑やかなりき花芒
秋の富士孤高に暮るる茜空

○ 横山さくら

鶴翼の布陣とみたり菊花展

○ この所作も父そのものよ冬隣

愁嘆場に彩の乱るる菊人形

薄茶たて下がる女将や柿紅葉

○ 手のひらに小仏木の実拾ひかな

○ 佐藤まさ子

箆に盛る母の温もり衣被

古民家の池の辺や竹の春

○ 棚一杯に東京産の甘藷積む

青年の肩にとまるや赤とんぼ

蜜柑山遙かに望む相模湾

○ 種田利子

コロナ禍を生き抜く秋の種を蒔く

谷音を聞きつつ咲くや沢蘆

○ 伸びて伸びてなほ紅き実の秋トマト

我が魂を育てし昭和青檸檬

柿食むや小さき幸せ我にもあり

春燈の句

安立 公彦選



朝冷や庭のコキアの紅葉して

東京 那須 禮子

ガレージの屋根這ふ蔦の紅葉せり

初蜜柑小粒なれども甘かりき

「さよなら」の乱るる文字や竜の玉(友遊けり)

虫の音を眠れぬ夜の友とせり

東京 遠藤 レイ

菊日和蠟扇の力士勝ちにけり

名月や玉兔てふ銘菓手に

生きめやも卒寿の来る秋の朝

留守の戸に甘藷掘りあぐ子と妻と

兵庫 尾崎 貞

ちやんちやんこ似合ふ己は卒寿前

小春日のにぎやかな声ピーチの子

亡き父母の年に近きや掘炬燵

一葉を偲ぶ今宵は十三夜

神奈川 犬嶋テル子

秋の薔薇マスクをしても香りけり

冬近しあしたは明日の風が吹く

木の葉髪めつきり細し卒寿越え

人知れず紅の色濃きからす瓜

草深き零余子の蔓の根を問はず

秋深し禿と白髪の日や婚

風雪に耐へたる古木帰り花

影向の松が舞台や菊人形(小豆屋書)

読まず積む読書の秋の暮れてをり

新米の香や高盛り的一本箸

秋草や一句を得んと惚ける

木犀の香り漂ひ日は沈む

秋寂ぶや黄昏どきの黄信号

東雲のぼつり白月鳥渡る

夕暮の色なき風や城下町

東京 小林 文良

岐阜 高井 修一

春燈賞（抄） 25句 自選

農野憲一郎

松飾恵方の風を絡め取る

弟に父の声聞く初電話

酸き菜漬け腹に搔込む四日かな

通夜酒のしづかな乱れ白椿

菜の花や雲みを渉る友が魂

ほそ首に蜜のおもたき紅椿

くちなはや天井裏にゐる羅刹

蛇の衣松が肌をかき抱き

礼拝堂へ装ひ軽き五月かな

微笑むと母に似る子や鯉幟

ままごとの客や青梅ぐだくさん



けが敗けを叱られ黒蜜心太

刃砥ぎ師の呼び声ひくき梅雨入かな

月涼し女房が先に湯をつかふ

夏休み石投げ水輪みてすぎぬ

西行に妻子ありけり葛の花

和泉野に朋を尋ぬる草虱

高野山に父の骨片露葎

朝顔の彩をうばひし残雨かな

相方の手も遅うなり障子貼

菊作り咲初めはまず仏壇に

改札窓たたき物訊く夜寒かな

頑として動かぬ心算いぼむしり

けあらしにゆるりと起動漁り船

風待ちの巨大風車や冬銀河